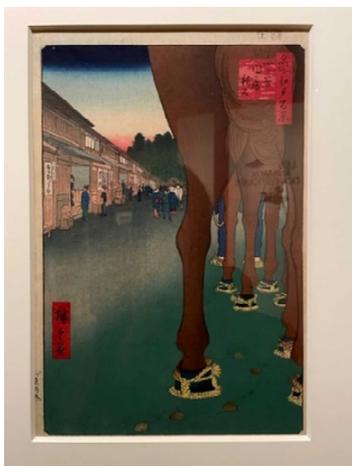


138 江戸時代のいきものたち (2022年11月24日)

パリ日本文化会館開館25周年記念展「いきもの：江戸東京 動物たちとの暮らし」展が同会館で開催されています(2023年1月21日まで)。この展覧会は、東京・両国にある東京都江戸東京博物館との共同開催で、同博物館が所蔵する浮世絵、着物や生活用品、近現代のおもちゃなど幅広いジャンルの作品・資料が展示されています。東京都江戸東京博物館は、江戸時代(1603-1868)から現在に至るまでの美術作品、歴史資料や復元模型を使って、江戸(東京)の文化と歴史を紹介しています。現在は大規模改修のために閉館中で、2026年初頭の再開が予定されています。



展覧会では、まず、人々に飼われたいきものを紹介しています。戦国時代に馬は戦いのために使われましたが、江戸時代になって平和な世の中になると、馬はその役目を変えて運搬用として使われるようになりました(写真左「名所江戸百景 四ツ谷内藤新宿」歌川広重)。犬や猫も身近ないきものでした。五代将軍・徳川綱吉は、犬を殺した者を極刑にしたり、病気の馬を捨てることを禁じるといった、動物を保護する生類憐みの令を出しました(展覧会では、「捨馬禁止触書高札」を展示)。綱吉は、

犬公方とも呼ばれたほど犬を大切にしました。いきものたちにとっては、江戸の町はパラダイスだったことでしょう。しかし、動物を過度に保護する政策は、人々の生活に大きな制約を課したため不評を買い、綱吉の死後直ちに、ほとんどの規則は廃止されました。



江戸は、18世紀初めには人口100万人を超える大都市になりました。人々の文化活動が増えるに従い、身近ないきものを楽しむようになりました。鳥のなき声の美しさを競う「うずら合わせ」の様子を描いた作品があります(写真右「鶉会之図屏風」(部分))。江戸時代には、厳格な身分制度がありましたが、この絵には武士、農民、僧侶など様々な身分の人が集っているのが特徴です。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

江戸時代は自然が豊かで、飼われないきものだけではなく、様々な野生のいきものがありました。こうした野生のいきものを描いた作品の中には、稲荷の使いとして知られる狐のように、信仰と結びついたものもありました。また、人々の生活に入っていったいきものもいました。部屋の中で、楽しそうにネズミを眺める女性たちや子どもを描いた浮世絵が展示されています（写真右「東風俗 福つくし「福ねずみ」揚州周延）。当時、ネズミは金運をもたらす神様である大黒天の使いと考えられ、ネズミを飼うことが流行しました。女性の後ろに米俵が見えますので、ここは商家なのでしょう。商売繁盛を願って、ネズミをかわいがっていた様子を描いたものと考えられます。しかし、1899（明治 32）年に日本国内でペストが発生し、東京での感染拡大を防ぐために政府がネズミを飼うことを禁止したため、ペットとしてのネズミはいなくなりました。



江戸時代後期になると都市化が進み、中国やオランダを通じて舶来した虎や象などの珍しいいきものが、見世物として人々の目に触れることになりました。明治時代になると、フランスやイタリアから来たサーカスが、人気を呼びました。さらに、日本の曲芸を取り入れたサーカスも誕生しました（写真右、「招魂社境内フランス大曲馬図」歌川広重（3代）（部分））。



時代とともに、江戸の人々の生活を取り巻くいきものや人といきものとの関わりは変化しました。数百年前の東京に暮らした人々の生活を想像しながら、ぜひ展示をご覧ください。

パリ日本文化会館 <https://www.mc.jp.fr/ja/agenda/un-bestaire-japonais-jp>

東京都江戸東京博物館 <https://www.edo-tokyo-museum.or.jp/>